

お客さんへの要望にお応えして、文字の太さに強弱を付けることもあります。ただし、あまりやりすぎると、文字が崩れてしまうので、その点は気を付けています。



大竹さんの弟
大竹健司さん(62歳)

彫る時にどんなことに気を付けていますか
刃の先は、力のかけ方を間違えてしまうと、すぐ欠けてしまうので、彫っているときは、ミスをしないよう刃先に常に集中しています。それでも、最近は年を取ったせいもあって、1時間くらい作業をすると目が疲れて見えなくなってくるので、少し休憩してから再開するようにしています。

昔からおやじの駒作りを見ていたので、割と早い頃から、気が付いたら駒を彫り始めていました。自分からなろうと思ったわけではなくて、お袋から、兄貴とお前は駒師の子どもなんだから、と言われていたこともあり、自然と駒師の道に進みました。私には兄貴がいたおかげで、商売のことは気にせず、駒師として駒作りに集中し、仕事に取り組むことができました。兄貴と一緒に、駒師として、常に最高の物を作ろうと思っています。

駒作りの主にどの工程を任されているのですか
主に彫りを任されています。彫りは、昔の書家が書いた文字をそのままの形で表現できるように、形を崩さず、字母紙の文字に沿って正確に駒を彫る作業です。

駒師になろうと思ったきっかけは
なっていたり、木目が縦に走る柁の部分(まき)が硬く彫りにくくなっていたりするので、さらに集中して作業し、失敗しないようにしています。

駒師になろうと思ったきっかけは



Interview

職人と家族
妻 栄子さん

駒作りの工程の中で、主にどんな作業を任されているのですか
以前は、木地の色合い・斑をそろえる作業をしていました。駒となる木地を綺麗にそろえていくのですが、これを始めると、パズルのピースを合わせていくように夢中になってしまい、時間を忘れてしまいます。今は、字母紙という文字が印刷された型紙を木地に貼る作業をしています。

作業をする上で気を付けていることは何ですか
字母紙貼りは、彫る文字のベースとなるもので、いかに真っ直ぐに貼るかが要求されます。なので、紙を貼る時はものすごく集中していますし、神経を使います。貼った紙がずれているのかわからないほどのほんの少しでも歪みがあると、主人に、紙を剥いで再度やり直しをさせられます。

大竹さんのどんなところが職人だと感じますか
休みの日でも仕事場に行って仕

事をしています。大変な仕事ですが、とにかく自分が納得のいくものを目指して試行錯誤していて、「職人は一生研究だ」と常々言っています。
ここまでやったからと満足することはなく、最高の駒を作るために一切の妥協を許さないところは、まさに職人そのものだと感じますし、そんな姿を見てみると少しでも力になりたいと思います。

駒作りをしていてうれしかったことはなんですか
お客さんからは、使いやすいとか木目がきれいだと言っていたことがありますが、出来上がった駒をお客さんが見て納得いく駒として本当に喜んでくれたときが、何より一番うれしいです。



大竹さんの妻
大竹栄子さん(69歳)



Interview

職人と家族
弟 健司さん